

乳児の「抱っこ」に関する心理学的研究の展望と今後の課題

飯 塚 有 紀*

The Psychological Prospects and Issues Related to “Holding” of Infant by Mother

IIZUKA Yuki

Abstract

This review paper examined research on issues related to “holding” of infant by mother. Research on this topic was divided into the three periods. Studies conducted between 1960’s and 1970’s, focused on preference of lateral position of holding (right or left hand holding the head of a baby) by mother and possible contributing factors for this preference. These studies did not take into consideration child’s developmental needs. Furthermore, child was assumed to be a passive recipient of mother’s holding. The role of attachment relationship between mother and child were incorporated into later studies in nursing. However, these are mainly unsystematic case studies whose findings need to be verified using more systematic and objective methodologies and research designs. It is suggested that future studies also need to pay attention to emotional effects of holding.

Keywords : Holding, Infant, Mother, Attachment, Review Study

1. はじめに

わが子を抱くことは、最も自然なことであり、それは、誕生直後から開始され、親子の相互作用の場として重要な第一歩となる。「抱っこ」によって“わが子”－“親”、特に“母”－“子”関係の実感が促進されると考えられる。西條・根ヶ山(2001)は、発達初期の母子関係について、運搬、コミュニケーションといった行為は「抱っこ」を介して実行され、したがって、「抱っこ」は母子という基本的な二者関係において、様々な行動を媒介する重要な行為であるとしている。このように、「抱っこ」には、親(特に母親)と乳児の基本的な関係や基本的信頼感が構築される場であり、乳児期以後の関係性を予測する因子として心理学研究の対象となりうると考えられる。

また、飯田・櫻井・泉(1997)は、親子は抱いたり母乳を飲ませたりすることを通して、身体的感覚的な相互交流を楽しみ、やがては温かい親子関係を築いていくと指摘している。さらに笹本(2002)は、母親が「抱っこ」によって、身体感覚で赤ちゃんの存在を感じ、まるで子どもが再びおなかの中に戻ったような、安心感や親近感を生じると言及している。

このように、母子の早期の「抱っこ」は、その後の愛着、親子関係に大きな影響を及ぼしているとする言及が多数ある。このような点からも「抱っこ」が心理学の研究対象となりうる事が分かる。例えば、ウィニコット

キーワード：抱っこ、乳児、母親、愛着、レビュー論文

*平成16年度生 人間発達科学専攻

(館、2006；井原、2009) やスターン (神庭、1989；神庭、1991) らを始めとした精神分析家や心理学者は、子どもの健康的な心的発達等に対する「抱っこ」の重要性を理論的に指摘してきた。これらの理論は、彼らの長年の臨床における経験や観察から導き出されたものである。多数の臨床例に裏付けされたこれらの理論は、「抱っこ」研究を進める上で無視できないものがある。しかし、これらの精緻な理論を実証するような研究は、未だなされていないのが実態であり、今後の研究が待たれるところである。以下にウィニコットの「抱っこ」に関する理論の概説を紹介する。

小児科医であり精神分析家でもあったウィニコットは、「ほど良い母親」は、子どもとの基本的信頼感を形成するために、適度なスキンシップと「抱っこ」を行い、スキンシップと「抱っこ」を通じて子どもの創造性や積極性を発達させる遊びを巧みに生活に取り込んでいくとしており、「抱っこ」の重要性を指摘している。ウィニコットのいう「ほど良い母親」とは、特別に優秀な育児能力や育児への強い熱意を持っている母親のことではなく、どこにでもいるような子どもに自然な愛情と優しさを注ぎ、一緒に過ごす時間を楽しむことのできる母親のことである。ウィニコットは、このように子どもの精神的発達に寄与する「抱っこ」の重要性を指摘しており、このような情緒的観点からの「抱っこ」の研究の必要性を指摘するものであると考えられる。

本論文では、上記を踏まえ、これまでの「抱っこ」に関わる論文の歴史的な流れを振り返ることを通じて、今後の「抱っこ」についての研究の展望と課題について考えることとしたい。なお、本論文で取り上げる「抱っこ」とは、子どもを持ち上げ、両腕に抱えるといった一連の現象として客観的に観察しうる行動であり、ウィニコット等によって提唱され、広く知られている乳児の心身の発達を支える心的空間・心的現象としての「ホールディング」とは異なるものである。

本論文ではまずは、「抱っこ」が心理学の研究対象となった1960年代～1970年代について検討する。この時期は、乳児を抱くとき人間は左右どちらの腕に持つことが多いかという「抱っこ」の左右の優位性についての研究が中心となっていた。これは、前述したような「抱っこ」の発達的な変化の側面や子どもの側の要因については、何も述べてこなかった。それに対する反省として出てきている近年の「抱っこ」についての発達心理学的アプローチについて次に述べたい。また、「抱っこ」に係る研究で独自の歩みがみられるのが、看護学等におけるケアとしての「抱っこ」研究である。一般に「カンガルーケア」と呼ばれる、「抱っこ」を活用した低出生体重児に対するケアについての研究についても触れたい。この分野は、「抱っこ」が親と乳幼児の関係性や愛着の構築に対して積極的な意味を持つことを示唆するような、事例研究が蓄積されており、今後の「抱っこ」に関する研究の方向性について検討をする際に重要な意味を持つと考えられるため今回取り上げることとした。その後、これらを踏まえて今後の課題について検討したいと考える。

2. 母親は子どもをどちらの腕に抱くか—1960年代～1970年代にみられる研究から—

1960年代～1970年代は、「抱っこ」が心理学的研究の対象として注目され始めた時期である。1960年代～1970年代にかけて行われた「抱っこ」に関する心理学研究は、乳児を左右どちらに持つことが多いかという、「抱っこ」の左右の優位性についてのものが多くみられ、乳児期における「抱っこ」の親子関係についての研究はほとんどなかった。ここでは、1960年代～1970年代に行われた、「抱っこ」の左右の優位性についての研究について振り返り、その意義について考察する。

この時代に左右の「抱っこ」の優位性の研究が多くなされた背景としては、女性では、乳児を抱く際に、左側で抱くことが多いにもかかわらず、男性では、ほとんどこのような傾向は見られないとの指摘があり (Rheingold & Keen, 1965 ; Richards & Finger, 1975)、本当に女性、特に母親は、乳児を左側に好んで抱く傾向があるのか、あるとすれば左右の抱っこの優位性がそもそもどのような意味を持つのかといった関心が寄せられたことが挙げられる (Rheingold & Keene, 1965)。Salk (1973) は、母親が子どもを抱いている写真を収集し、眺めているうちに母親の左胸に子どもの頭がある写真が多いことに気付き、母親が子どもを左側に有意に多く抱くという現象は、子宮の中で聞いていた心音を子どもが聞いて、なだめられるためではないかと推測した。一方で、服をつけず直接胸に耳を近づけないと心音を聞くことができないにもかかわらず何故、子どもを左側に有意に多く抱くのかという反論があった (Bundy, 1979 ; Weiland, 1964)。このような反論に対して、Finger (1978) は、母親は、

心臓に近い左側に子どもを抱くと想定した。そこで649組の母子を自然観察したところ、有意に多くの母親が、子どもを左側に抱いていると指摘した。また、左側に抱くことが好まれるのは、乳児の頭の向きの非対称性が関係しているとの指摘もあった (Turkewitz & Birich, 1971)。すなわち、乳児の頭は右側を向いていることが多いのでこれに影響を受けて抱き上げるとき、左側を好む傾向が優位になるのではないかとしている (Cohen, 1972; Wickelgren, 1964)。そこで、Bundy (1979) は、141名の心理学の入門コースの大学生に本物の子どもを抱くように人形を抱くことを求めたところ、左側に抱く学生が右側に抱く学生よりも有意に多かった。この研究では、人形は生後1ヶ月程度の大きさであり、人形の頭が60度右側を向いている群、同じく60度左側を向いている群、真ん中を向いている群に分けて検討されたが、いずれの群でも左側に子どもを抱く学生が有意に多かった。なお、この研究では、男女差は見られなかった。また、右利きの学生の多くが左腕に子どもを抱くことも明らかとなった。この結果から、Bundy (1979) は、母親が子どもを左側に抱くのは、乳児の頭の生まれつきの位置や母親の心音を聞くことにより子どもがなだめられるといった理由よりは、母親がきき腕である右手が自由になるためではないかと反論している。

このように「抱っこ」の左右の優位性に関する研究は1960年代～1970年代にかけて活発に行われてきた。このことは「抱っこ」が心理学の研究対象のひとつとなりうること、また、“母親の利き腕”や“乳児の頭の向きの非対称性”といった様々な「抱っこ」に係わるいくつかの要因を明らかにした点で意味があったといえる。しかし、これら一連の研究には、親側の要因のみに注目し子どもが「抱っこ」の成立に及ぼしている影響や子どもの側の発達の变化について、視野に入っていなかったという点で課題を残した。

1970年代以降、心理学においては「抱っこ」に関する研究は下火になっていった。その背景には、「抱っこ」の左右の優位性については、多文化比較や比較行動学といった他分野において、優位性に対するアンチテーゼが示されたためであると考えられる。すなわち、心理学の研究では、理由は様々あるものの母親は子どもを左腕に抱くことを好むということで結論にいたっていたが、他分野から異が唱えられたのである。

例えば、Nakamichi (1996) によると、Salkを始めとする多くの研究では、母親が乳児を抱くときには左腕に子どもを抱くことが多いとされてきたが、しかしながら、マダガスカルにおけるフィールド観察によると、906人の女性のうちの64%、231人の男性のうちの73%が、右側に抱くことが明らかとなった。これは、座っているときばかりでなく立っているときや歩いているときなど、様々な場面において右側に抱くことが好まれていた。このような傾向は、マダガスカルの全ての民族において観察された。このことから、母親が子どもを有意に左腕に多く抱くという行為は、文化によって異なる可能性があることが指摘され、普遍的なものではないことが明らかとされた。

また、Hermanら (1995) は、チンパンジーにおける「抱っこ」の際の左右の優位性について調査した。彼らの研究によるとこのような左右の優位性はチンパンジーにはみられず、優位性はヒトに限られるのではないかと指摘している。その理由としては、チンパンジーとヒトの行動様式が異なるからではないかとしている。例えば、チンパンジーでは子どもを抱くことがまれであるし、子どもが泣くこともほとんどない、加えて顔を見合わせて何かをするということもないことから、優位性が必要ではないのではないかとしている。

このように、「抱っこ」の研究は1970年代以降も左右の優位性について他分野も巻き込んでなされてきたが、それ以上のものではなかった。やはり、親側の要因のみに注目し子どもが「抱っこ」の成立に及ぼしている影響や子どもの側の発達の变化について、視野に入っていなかったという点で課題を残していたといえよう。

3. 「抱っこ」の発達の变化及び子どもの要因への注目—近年の研究から—

前述したとおり、1960年代～1970年代の研究の反省点として、親側の要因のみに注目し、子どもが「抱っこ」の成立に及ぼしている影響や発達の变化を視野に入れてこなかったことを指摘したが、このような反省から生まれてきた研究として、近年の「抱っこ」に関する研究における西條らの一連の研究があげられる。西條は、「抱っこ」の変遷や子どもの「抱っこ」における役割を検討することにより、「抱っこ」という一行為であっても母子関係を表し「抱っこ」を検討することにより得られた知見は、母子関係全般に示唆を与えうるとしている。このような視点から西條らは次のような研究を行っている。西條・根ヶ山 (2001) は、横抱きから縦抱きへの発達

的变化を横断的な観察を用いて検討した。対象者は、生後8ヶ月から2年1ヶ月の乳幼児とその母親29組であった。行動の記録には、ビデオカメラを用い各組1回ずつの観察を行った。その結果、乳児の首のすわりによって、「横抱き」から「縦抱き」に移行していくことを観察によって明らかにしている。さらに、乳児も抱かれる際に、手を親に添えて「抱っこ」の安定性を高める行動や脚で親を抱き込む行動によって「抱っこ」の成立・維持に積極的に貢献しており、乳児を抱いている際の母親の姿勢状態（座位、立位、歩行）や子どもの姿勢発達（未頸定、頸定、座り、直立、安定歩行）という身体要因を基盤として、「抱っこ」は、母子が互いに関与することで成立・維持される相互的行為であるとしている。西條（2002）では、この横抱きから縦抱きへの移行プロセスについて生後1ヶ月から毎月1回で計7回の縦断的観察を母子16組に行っている。行動の記録にはビデオカメラを用いた。その結果、「横抱き」から「縦抱き」への移行プロセスは、次の3つのパターンがあることが明らかとなった。① 乳児が抵抗を示し始めると、母親は、緩やかな間主観的な解釈を媒介として、乳児が安定する抱き方を探索し、その結果「抵抗」の収まる「縦抱き」に収斂すること、② 乳児の首のすわりといった身体情報が母親に「縦抱き」をアフォードすること、③ 前述の双方が影響を与えて「縦抱き」へと移行することの3パターンである。以上のことから、「抱っこ」という行為は、母子の相互作用を通して一定の方向へ自己組織化していく行為であることが示されたとしている。

また、飯塚（2009）は、低出生体重児を対象として「抱っこ」について検討している。対象となったのは、低体重のために保育器に子どもが収容されて母親と分離され、子どもが保育器を出ることによって再統合にいたった20組の母子であった。研究では、特に「抱っこ」と「子どもの動き」に注目して観察を行った。その結果、まず「抱っこ」の種類の変化について検討するため、再統合直後（以下「前期」）と退院直前（以下「後期」）を比較したところ、前期では「横抱き」の出現数が最も高く、後期では「対面抱き」が最も高かった。これは、「横抱き」に「対面抱き」が追加されるという「抱っこ」の種類が増加の過程であった。また、「子どもの動き」の出現数を検討したところ、後期の出現数は、前期のそれに比して有意に増加した。このことから、母親が「対面抱き」を「抱っこ」の種類に加える過程と「子どもの動き」の増加との間には密接な関係が予想されたため、この関係について検討すべく「抱っこ」の前後に起こるイベントを考察したところ、「対面抱き」にはより遊び的な機能、「横抱き」ではあやしやなだめといった機能のように、その機能に違いがあることが明らかとなったとしている。

これらの研究では、「抱っこ」の成立には親の要因だけではなく子どもの要因も積極的に関与していることを明らかにした点、また、横断的・縦断的に検討することで発達の視点を組み込むことによって「抱っこ」の研究に新たな示唆を与えたという点で評価できる。しかし、「抱っこ」の行動面についてのアプローチはなされているものの、その背景にある母親と子どもの関係性、愛着の形成といった情緒的な面についての直接的なアプローチという点ではあまり配慮されていなかったという問題点があった。

4. ケアとしての「抱っこ」—看護学において蓄積された示唆から—

前述のとおり、これまで心理学的研究では「抱っこ」と母子関係の成立や愛着形成については、精神分析や愛着研究において諸説触れられてはきたものの、研究としてはあまりされてこなかった。しかし、「抱っこ」をケアとしてとらえ、「抱っこ」に関するこれら情緒的側面に目を向けた研究が看護学等の分野で独自に行われてきた。この点について以下に述べていきたい。

「抱っこ」は、ケアとしての側面も持っている。一般に「カンガルーケア」と呼ばれるもので、低出生体重児を、オムツを1枚つけただけの裸の状態でも母親又は親族の乳房の間で抱かせ、その上から衣服をつけ、親が保育器の代わりにするというものである（堀内、1999）。「カンガルーケア」は、1979年コロンビアのボゴタでRey, EとMartinez, Hという2人の小児科医師によって極低出生体重児を対象にはじめられた。保育器が不足した為、母親などに自分の体温で赤ちゃんを温めてもらうという処置をとったことが始まりである。当時のボゴタでは、定員過剰、機材不足、スタッフ不足という状態にあったため、1つの保育器に2～3人の子どもを同時に収容することもめずらしくなかった。そのため、交差感染の頻度が高く、多数の低出生体重児が感染のため死亡していた。さらに、早期の母子分離によって母子の愛着形成ができないため、たとえ子どもが退院できても、その後、養育遺棄につながることもまれではなかった（堀内、1999）。しかし、カンガルーケアの導入によって、低出生体重

児であっても自律哺乳が容易となり、感染源から隔離することができたため、低体温・栄養不足・交差感染による死亡が激減した。特に極低出生体重児の生存率は著しく改善し、養育遺棄も少なくなった。また、予期せぬ効果として、体重の増加、発達の促進という医学的効果がこれまで実証されてきた。子どもと母親との「愛着」の形成や、母親の気持ちの安定につながるといった効果も報告されているが、事例研究が多く、この点を実証的に研究したものはほとんどないのが現状である。

ここで、事例研究についていくつか触れたい。北（2007）らは、カンガルーケアを実施した7組の早期産の母子を対象に、延べ51回の参加観察を行い、母子の関係性の変化を記述した。その結果、全事例においてカンガルーケアの回数を重ねるごとに母子の関係性は進展していたが、うち2例については母子関係の進展が緩慢であった。緩慢となった要因としては、児の在胎週数が短く、超低出生体重児であり、カンガルーケアの開始までに長い期間を要していることが共通していた。また、児の状態が一時重篤となった事例においても関係性の一時的後退が見られたが、カンガルーケア再開により速やかに関係性が回復したことが分かったとしている。

飯田・櫻井・泉（1997）は、ハイリスクの子どもと母親にカンガルーケアを導入した2例について母親の心理的变化に注目し検討している。一つめの事例は、出生時体重1393gの低出生体重児であり、ダウン症候群や慢性肺気腫及び動脈管開存症を合併していた。当初、母親は子どもへの面会頻度も少なく面会しても10分～20分程度で帰ってしまい、面会ノートへの記載も全くなく、スタッフはこのままでは母子の関係性が形成されにくいと判断し、カンガルーケアの導入に踏み切った。導入に際しては、母親は「後で何かしてあげれば良かったと思うのはいやなので、子どもにとって良いことをやってあげたい」というやや消極的な反応であった。実際に開始すると一変し「気兼ねなく抱っこができる」と喜び、ほとんど毎日カンガルーケアをするようになった。また、子どもの反応性も増し、それを読み取ることでより一層子どもに親近感をもち「やっと本来の親子の姿になれた」と表現した。その変化は、別人かと思うほどであったという。

二つめの事例は、出生体重428gの超低出生体重児であり、慢性肺疾患及び脳室周囲白質軟化症を併発していた。両親の罪責感や無力感は大きなものがあり、母親が産科に入院中も、自分一人では子どもへの面会ができず、いつも夫と一緒にであった。面会に来ても保育器を覗き込みもせず、椅子に座ったまま、ぼーっとしていることがしばしばあり、タッチングもほとんど見られなかった。カンガルーケアの導入を勧めると、当初は「経鼻陽圧呼吸を行っているから怖いので、もう少し後にしたい。」と消極的であった。そのため、経鼻陽圧呼吸を離脱後、初回のカンガルーケアを行った。それまでは、おくるみで保育器外抱っこをしているとき、なんとなくぎこちなく、頼りない印象があったが、カンガルーケアをするようになって、子どものなだめ方やあやし方も上手になり、表情もいきいきとして、子どもに対する話しかけも多くなった。母親の面会頻度も増え、他の母親達とも交流する姿が見られるようになったとのことである。2つの事例から、カンガルーケアを行うことによって、肌と肌を触れ合い、身体感覚的な相互交流が可能になると、親と子の関係性の発展過程が自然に促進されていくと指摘している。

その一方で、「関係性を促進する」目的で強要してはならないとも指摘している。親と子が相互に影響し合い、関係を作っていくには、新生児集中治療室が親と子をサポートする場として機能することが必要であり、かつ、新生児集中治療室が親と子が安心して、肌を露出し無防備な姿で抱き合っている場所であるように保つ努力が必要であるとしている。

このように事例を丁寧に分析することによって、「ケア」としてのカンガルーケアの意義について確認することができたことは評価できるが、事例の積み重ねによってどのような結果が共通に見られるかについて検討された研究はあまり見られなかった。日本で行われたものとして、大石ら（2006）の研究があげられる。

大石らの研究は、医学中央雑誌で検索した原著論文64編を用い日本におけるカンガルーケアの効果について共通して見られるものを抽出している。対象となった64編の原著論文のうち24編の論文において「親子の良好な関係・愛着の形成」がカンガルーケアの効果としてあげられていたとしている。これについては、救命を主として途上国で始まったカンガルーケアが、日本においてはハイテクノロジーゆえに妨げられる愛着形成過程を取り戻すことが主となったのではないかと考察している。

事例研究以外の研究として挙げられるものとして、笹本（1999）と森藤ら（2004）の研究がある。笹本（1999）は、花沢の対児感情評定尺度の結果とカンガルーケアの感想や子どもの様子を記載してもらったカンガルーケア

日誌の内容をもとに、カンガルーケアが母親の気持ちの変化におよぼす影響について検討している。対象となったのは、1996年2月～1997年7月の18ヶ月間に聖マリアンナ医科大学横浜西部病院NICUでカンガルーケアを行った早産母子35組であった。花沢の対児感情評定尺度によって、① 接近得点：母親が我が子を肯定的に思う気持ち、② 回避得点：母親が我が子を否定的に思う気持ち、③ 拮抗指数：両方の気持ちの拮抗の度合いを測定した。カンガルーケア日誌では、毎回のケアの感想について、① 嬉しかったこと、気持ち良かったこと、② 気になったこと、不安だったこと、③ その他などを記述してもらった。カンガルーケア開始時と3回目のカンガルーケア終了時の比較を行ったところ、カンガルーケア3回終了時には、接近得点が有意に増加し、拮抗指数は有意に減少した。この時期の母親の感想では、我が子の反応を読み取る文章がみられ、お互いの親密度が深まっている記述が多く見られるようになったことが分かった。カンガルーケア8回目には、感想の中に「我が子との一体感」「母親としての達成感」などが表現され、接近得点も退院時にはさらに上昇し、お互いの関係がさらに深まっていることが伺えたとしている。

森藤ら(2004)は、長期入院が予測された子どもの両親5組について、実施前後の気持ちについてのアンケート調査を実施し検討している。調査内容は、① 子どもに対面する前の気持ち、② はじめてカンガルーケアを行ったときの気持ち、③ カンガルーケアを行ってからの気持ち、④ カンガルーケアについてどう思うかについてであった。分析方法については、記述内容から気持ちの変化について述べている部分を抽出し、カンガルーケアの効果について考察している。その結果、子どもに対面する前の気持ちでは、不安が表現された記述が主であった。はじめてカンガルーケアを実施したときの気持ちでは、不安が軽減され肯定的な感情に変化しており、全員が好意的にとらえていたことが明らかとなった。

5. 乳児の「抱っこ」に関する心理学的研究の今後の課題

ここまで、「抱っこ」の左右優位性についての研究、発達の観点を踏まえた研究及びケアとしての「抱っこ」に関する研究を概観してきた。

1960年代～1970年代を中心に行われた研究は、「抱っこ」の左右優位性についての研究が主であった。つまり、主に母親が「抱っこ」をするとき左腕、右腕どちらに多く抱くのか、また、それは何故なのかという問いがなされた。これらの研究では、子どもが母親の心音を聞くことで落ち着くため左腕に子どもを有意に多く抱くという指摘が大勢を占めていた。それを支持する論文が相次いだ。しかし、1970年代後半になると、母親の心音を聞くことで子どもが落ち着くために母親は子どもを左に抱くというよりは、利き腕である右手を空けておくために、母親は左腕に子どもを有意に抱くという反論が呈された。この後、これらの研究は、多文化間比較へと発展し文化によっても異なるという論争へとつながっていく。1960年代～1970年代における「抱っこ」の研究の貢献は、「抱っこ」が心理学の対象となりうるものであることを明らかにした点、また、「抱っこ」に関する様々な要因が取り上げられたことがそれ以降の「抱っこ」に関する研究に示唆を与えた点は評価できる。一方で、「抱っこ」の左右優位性に注目されすぎたためか、そこでの子どもの要因や発達段階での「抱っこ」の変化をとらえるという視点は取り残されてしまった。

近年の研究では、これまで「抱っこ」に関わる親側の要因のみに注目し、子どもが「抱っこ」の成立に及ぼしている影響や発達の变化を視野に入れてこなかったことに対する反省から始まった。西條ら(2001)は、「抱っこ」が「横抱き」から「縦抱き」移行する時期があることを発見した。その時期は、発達段階でいえば「頸定」(生後4ヶ月頃)に当たることが分かってきた。この時期になると子どもが「横抱き」に対する抵抗を示すこと、「抱っこ」がなされている際には、親に手を添える、足で親を抱っこ込むといった「抱っこ」を安定させる行動を子どもがとるなど、子どもも「抱っこ」の成立に積極的に関与していることが分かってきた。また、飯塚(2009)においても、子どもの動きの増加が「横抱き」から「対面抱き」への移行を促していることが明らかとされた。また、「横抱き」「対面抱き」にはそれぞれの機能があることも分かった。これらの研究は、「抱っこ」を静的なものではなく、発達とともに変化していくものとしてとらえたという意味で、「抱っこ」の研究に一石を投じたといえる。また、これまで注目されてこなかった子ども側の要因も視野に入れたという点で評価できる。しかし、これらの研究でも「抱っこ」という行動面についてのみ注目しており、「抱っこ」を通じた愛着形成や母子関係の成立等といっ

た情緒的な面にはあまり目が向けられていなかった。

ケアとしての「抱っこ」として「カンガルーケア」に関する研究を紹介した。これらの研究は主に看護学の分野で活発に行われた。この分野では、体重増加や発達の促進などについての緻密な効果研究が多くなされ、その効果が実証された。それ以外に、子どもと母親との「愛着」の形成や、母親の精神的安定といった心理的効果も報告されている。これらの研究対象は主に低出生体重児等のハイリスク児とその母親であった。高いレベルにある日本の新生児医療の現場においては、「カンガルーケア」の安全性や体重の増加等といった効果についての関心から愛着形成の促進等の情緒面への関心へと移行しつつある。すなわち、ハイリスク児を出産したという傷付きをもった母親が、どのように「カンガルーケア」をつうじて愛着や母性を育てていくのか、といった情緒面への効果が期待され調査研究が行われてきたのである。その結果、「カンガルーケア」は、母親の愛着の形成、母子関係の改善等といった効果が指摘された。このことは、「抱っこ」が、行動面の変化だけでなく情緒面での変化をも起こしうる可能性を示唆したものとみえる。ハイリスク児の出産という危機的状況において「抱っこ」が情緒面へも効果を及ぼしうるという点を明らかにしたことで、これらの研究は臨床的示唆があったと思われる。しかし、その多くは、著者の感想や印象であったり、母親の行動を観察して母親の内面を推測したものをまとめた事例研究であったりしたものであり、母親の情緒面に深く踏み込んだものが少なかった。今後、感想や印象、行動観察だけでなくより情緒的な部分に踏み込んだ研究が必要となろう。

「はじめに」でも触れたように、臨床経験をつうじて精神分析家等が提唱した、「愛着」形成と「抱っこ」の関係や「母子関係」の形成と「抱っこ」の関係など母親と子どもの情緒的な関係性に言及した理論はある。しかし、それを裏付ける研究はほとんどなされてこなかった。確かに「愛着」や「母子関係」などの情緒的な関係性を指標にすることは難しい。どのように測定するのが適切かといった問題もはらんでいる。

また、「抱っこ」には「ぬくもり」、「やわらかさ」、「重み」、「手触り」といった非常に情緒的な因子が乳児期の母と子どもの関係性の形成に大きく寄与していることは明白と考えられ、これを扱わずにはいられない。これらは、これまで行われてきたような、外側からの観察等だけでは取り扱えないと考える。当事者である母親が「抱っこ」をどのように体験しているかを丁寧に扱う方法が必要と考える。

考えうる方法としては、インタビュー調査によって、母親自身から子どもを「抱っこ」するという体験を語ってもらい、その語りを分析していく方法、例えばグラウンデッドセオリー・アプローチや現象学的アプローチが考えられよう。何故ならば、「抱っこ」を通じた「愛着」や「母性」の形成過程といった動的な現象についてじかに取り扱うことができるからである。

このように、出生時から縦断的に「抱っこ」について語ってもらうことを通じて、前述の課題がクリアされる可能性を探ることができると考えられる。また、このような研究によって「抱っこ」の研究にあらたな展開がうまれるであろう。

文献

- ・Bundy, R. (1979). Effect of infant head position on sides preference in adult handling. *Infant Behavior and Development*, 2, 335-358
- ・Choen, L. B. (1972). Attention-getting and attention-holding of infant visual preferences. *Child Development*, 43, 869-879
- ・Finger, s. (1978). Child-holding patterns in western art. *Child Development*, 46, 267-271
- ・Herman Dienske・Brian Hopkins・Aaron K. Reid. (1995). Lateralisation of infant Holding in Chimpanzees: New Data Do Not Confirm Previous Findings. *Behavior*, 132, 801-809
- ・堀内勤・飯田ゆみ子・橋本洋子 (1999). カンガルーケア；ぬくもりの子育て 小さな赤ちゃんと家族のスタート. 大阪：メディカ出版
- ・井原成男 (2009). ウィニコットと移行対象の発達心理学. 東京：福村出版
- ・飯田ゆみ子・櫻井昌恵・泉洋子 (1997). カンガルーケアによって促進された親と子の絆. *小児看護*, 20, 1608-1615
- ・飯塚有紀 (2009). 低出生体重児における母子再統合場面での「抱き」の変化と母子相互作用. *発達心理学会*, 20, 278-288
- ・神庭靖子・神庭重信 (1989). 乳児の対人世界 理論編. 東京：岩崎学術出版社
- ・神庭靖子・神庭重信 (1991). 乳児の対人世界 臨床編. 東京：岩崎学術出版社
- ・北悠理・溝口茜・寺田有希・長谷川ともみ (2007). 早期産児における母子関係の進展：カンガルーケアを実施した7事例の検討. 富山

飯塚 乳児の「抱っこ」に関する心理学的研究の展望と今後の課題

- 大学看護学会誌, 6, 47-56
- Masayuki Nakamichi. (1996). The left-side holding is not universal: Evidence from field observations in Madagascar. *Ethology and Sociobiology*, 17, 173-179
 - 森藤香奈子・宮原春美 (2004). 低出生体重児と両親へ導入したカンガルーケアの効果. 長崎大学医学部保健学科紀要, 17, 53-57
 - 大石美寿々・浅田祥子・黒木恵美・伊達香菜子・三山智世・中尾優子 (2006). 文献からみた国内におけるカンガルーケアの方法. *保健学研究*, 19, 21-26
 - Rheingold, H. L., & Keene, G. C. (1965). Transport of the human young. In B. Foss(Ed.), *Determinants of infant Behavior*; Vol. 3. London: Methuen
 - Richards, J.L., & Finger, S. (1973). Mather - child holding patterns: A cross - cultural photographic survey. *Child Development*, 46, 1001-1004
 - 西條剛央 (2002). 母子間の「横抱き」から「縦抱き」への移行に関する縦断的研究: ダイナミックアプローチの適用. *発達心理学研究*, 13, 97-108
 - 西條剛央・根ヶ山光一 (2001). 母子の「抱き」における母親の抱き方と乳幼児の「抱かれ行動」の発達: 「姿勢」との関連を中心に. *小児保健研究*, 60, 82-90.
 - Salk, L. (1973). The role of the heartbeat in relations between mother and infant. *Scientific American*, 228, 24-29
 - 笹本優佳. (1999). 母子発達とカンガルーケア. 堀内勤・飯田ゆみ子・橋本洋子 (編). *カンガルーケア* (P.91-96). 大阪: メディカ出版
 - 笹本優佳. (2002). 新生児集中治療室におけるタッチケアについて. *日本新生児看護学会誌*, 9, 14-18
 - 館直彦 (2006). *ウィニコット用語辞典*. 東京: 誠信書房
 - Turkewitz, G., & Brich, H. G. (1971). Neurobehavioral organization of the human newborn. In J. Hellmuth(Ed), *Exceptional infant*, Vol. 2. *Studies in abnormalities*. New York: Brunner/Mazel, inc
 - Weiland, I. H. (1964). Heartbeat rhythm and maternal behavior. *Journal of American Academy of Child Psychiatry*, 3, 161-164
 - Wickelgren, L. W. (1967). Convergence in the human newborn. *Journal of Experimental Psychology*, 5, 74-85

付記

この論文を作成するにあたって、ご指導を賜りました人間文化創成科学研究科人間発達科学専攻井原成男先生、岩壁茂先生に心から感謝申し上げます。ありがとうございました。